

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2019年11月20日 (Vol.156)

「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その1 ミュシャとサラ・ベルナール」

「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その1 ミュシャとサラ・ベルナール」



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha LOC 3c05828u.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_LOC_3c05828u.jpg)

19世紀末のパリで、雑誌や新聞の挿絵などの仕事をして、レンズ豆とインゲン豆だけでかろうじて生計を立てていた無名の異邦人のアーティストが、突如としてパリのグラフィックアートの世界を席卷し、やがてアール・ヌーボー※の旗手と呼ばれるようになったアルフォンス・ミュシャ(1860-1939)。

そのきっかけはパリでもっとも人気があり、「神なるサラ」と称されていた舞台女優サラ・ベルナールとの運命的な出会いでした。

※アール・ヌーボーはフランス語で「新しい芸術」を意味し、アーツ・アンド・クラフツ（美術と工芸）から生まれた美術様式。

芸術が一部の富裕層のためだけでなく、民衆に奉仕する『用の美』を目指すもの。

「季語に遊ぶ」では前8回、西洋美術と俳句の組み合わせを試みてきました。

第9回の今回から数回にわたり『ジスモンダ』『ヒヤシンス姫』『黄道十二宮』などポスター・挿絵を究極の美へと昇華させ、芸術を一部の富裕層のためだけでなく、「民衆のための芸術」を目指すと明言していたミュシャ。

そんな彼の作品とその作品に合う俳句を選びました。

その1回目の今回は女優サラ・ベルナールを描いた作品を紹介します。

1. 『ジスモンダ』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1894 - Gismonda.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1894_-_Gismonda.jpg)

1894年 | リトグラフ、紙 217.9 cm × 75 cm

1894年の12月26日、ミュシャは友人のクリスマス休暇の代わりに臨時雇いで印刷工房で試し刷りの校正をしていました。

その工房のマネージャーにサラ・ベルナールから「来年1月4日から始まる舞台のためのポスターを元日までに広告掲示板に貼りたいので、至急制作してほしい」との依頼がはいったのです。

しかし、工房と契約していた他のアーティストたちはみんなクリスマス休暇中で、唯一依頼できたのは挿絵画家のミュシャでした。

元旦からポスターを張り出すという大至急の仕事でしたが、ミュシャは挿絵で培った技術を生かし、大急ぎで仕上げ納期に間にあわせました。

ミュシャが制作した『ジスモンダ』はポスターのそれまでのデザインを刷新するものでした。

細長い形、繊細なパステル調の色彩、ほぼ等身大のポスターは崇高で落ちついた雰囲気をかもし出しています。

サラ・ベルナールは、このポスターを見て「なんて美しいの」と涙を流して感動し、すぐにミュシャと六年間にわたる契約を結び、二人の蜜月期間がはじまります。

パリの人々の間でこのポスターは大人気となり、コレクターたちは手に入れるためにポスター貼りを買収したり、あるいは夜中に剃刀を使って広告板から取りはずしました。

描かれているのは当時フランスで最も人気があった劇作家ヴィクトリアン・サルドゥ（1831-1908）作の戯曲『ジスモンダ』。

中世アテネを舞台に、王妃ジスモンダをめぐる恋愛劇で、信仰に目覚めたジスモンダが「棕櫚（しゅろ）の日曜日（パーム・サンデー）」の行列に加わるクライマックスシーン。

ここでは、サラ・ベルナールが扮するジスモンダが持つシュロに注目して季節別に棕櫚、櫻欄を詠んだ句を選びました。

棕櫚の日の雑踏に喉乾きけり

柏原眠雨(かしわばら みんう) (1935-)

季語<棕櫚の日=棕櫚の日曜日>で晩春

棕櫚の日曜日とは復活祭の1週間前の日曜日。

イエスが弟子たちに受難を告知して、エルサレムに入城したのを記念する日。

『新約聖書』によると群衆（ユダヤ人）はイエスを「支配から解放するもの」と期待し、イエスの通る道に上着や棕櫚の枝を敷いたり、振ったりして歓迎しました。

それで棕櫚の日曜日といいます。

しかし、その4日後には、同じ群衆が勝手な思い込みからイエスを処刑せよと叫び、十字架にかけられることとなります。

そこからイエスの受難を思う日とされています。

梢より放つ後光やしゅろの花

与謝蕪村(よさ ぶそん) (1716-1784)

季語<しゅろ(棕櫚)の花>で初夏

古寺に皮むく櫻欄の寒げなり (櫻欄=しゅろ)

上島鬼貫(うえしま おにつら) (1661-1738)

季語<皮むく櫻欄=棕櫚剥ぐ>で初冬

2. 『椿姫』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1896 - La Dame aux Cam%C3%A9lias - Sarah Bernhardt.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1896_-_La_Dame_aux_Cam%C3%A9lias_-_Sarah_Bernhardt.jpg)

1896年 | リトグラフ、紙 207 cm × 76.5 cm

原作は1848年にフランスで出版されたアレクサンドル・デュマ・フィス（小デュマ）（1824-1895）の自身の恋愛体験をもとにした小説。
サラ・ベルナールの主演舞台とヴェルディ（1813-1901）のオペラ「椿姫（ラ・トラヴィアータ）」で有名になりました。

ヒロインは1ヶ月のうち25日間は白い椿を身につけ、残りの生理期間には赤い椿を身につけていたことから「椿姫」と呼ばれていた高級娼婦マルグリッド（オペラではヴィオレッタ）。
サラ・ベルナールは「椿姫」を数多く演じていて、1896年9月に開始された再演の際にミュシャに舞台衣装とともにこのポスターの制作を依頼しました。
このポスターはヒロインが、結核で亡くなることによって、父親から反対されていた結婚の約束から恋人を解放するという悲劇を描いています。
白い衣装はマルグリットの純愛を、髪を飾っている白い椿はやがてしおれる花で悲恋を表現しています。
また、上方に描かれている棘の多いバラの花は心を刺すバラの棘として、この舞台の中心テーマである愛の究極の犠牲を思わせるものです。
華やかさの中に悲しみを表現するため、全体的に淡い色調で描かれています。

ここでは作品の「椿姫」から春の季語である「椿」を詠んだ句を選びました。

落椿夜めにもしろきあわれかな

久保田万太郎（くぼた まんたろう）（1889-1963）

落椿美しければひざまづく

田畑美穂女（たばた みほじょ）（1909-）

椿咲くたびに逢いたくなっちゃだめ

池田澄子（いけだ すみこ）（1936-）

3. 『ロレンザッチオ』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1896 - Lorenzaccio.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1896_-_Lorenzaccio.jpg)

1896年 | リトグラフ、紙 208.0 cm × 76.5 cm

1834年に出版されたロマン派詩人アルフレッド・ミュッセ（1810-1857）原作の戯曲。
16世紀イタリア、フィレンツェが舞台。
サラにとっては初めての男役で、メディチ家のロレンザッチオを演じました。
暴君のアレッサンドロの圧政に苦しんでいるフィレンツェを救うためにロレンザッチオが従兄弟であるアレッサンドロの殺害を企てている場面です。
画面上部ではアレッサンドロをあらわす龍がメディチ家の紋章である6個の赤い丸を描いた楯に襲いかかろうとしています。
（薬種業からはじまったとされるメディチ家の成り立ちを6個の丸薬が示し、医薬をあらわす **medicine** という言葉は今も生きています。）
足もとでは正義をあらわす剣が男（アレッサンドロ）の体を刺し貫いています。

当時は役者とポスターの顔は似てなくてよかったのですが、このポスターはサラの実際の容貌によく似ていたのも、当時の人たちに強烈な印象を与えました。
ミュシャはこのポスターで初めて、サラの正面向きの顔を描いています。
思案しているこのポーズは、ミケランジェロからロダンまで続く「考える人」のモチーフです。

ここでは、アレッサンドロをあらわす龍に注目し、龍が登場する句を選びました。

龍天に登りし村の大霞

長谷川權(はせがわ かい) (1954-)
季語<大霞>で三春

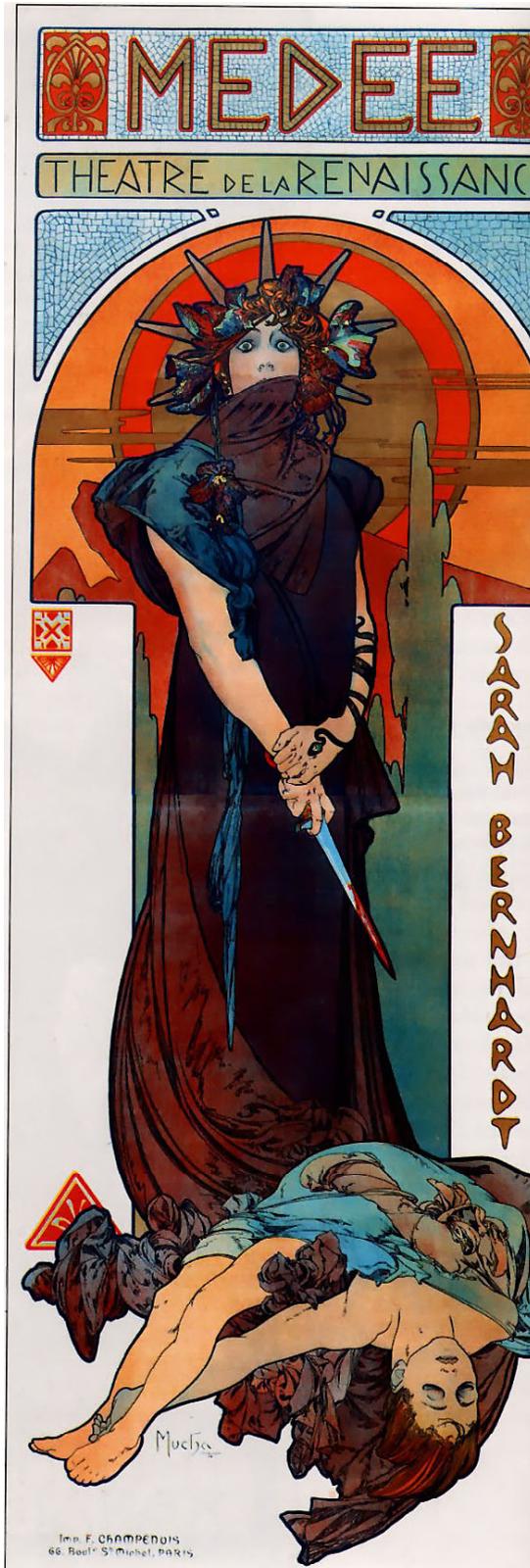
山百合や水迸る龍の口（迸る＝ほとぼしる）

正岡子規(まさおか しき) (1867-1902)
季語<山百合>で仲夏

寒垢離に背中の龍の披露かな（寒垢離＝かんどり、寒中に冷水を浴びて心身を清め、神仏に祈願すること）

小林一茶(こばやし いっさ) (1763-1828)
季語<寒垢離>で晩冬

4. 『メデリア』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - Medea.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_Medea.jpg)

1898年 | リトグラフ、紙 207.5 cm × 76.5 cm

ギリシャ三大悲劇詩人の一人であるエウリピデス（誕生紀元前 480 年頃-紀元前 406 年頃死没）の原作に基づき、フランスの詩人カチュール・マンデス（1841-1902）が現代的な解釈を施した戯曲。1898 年 10 月 28 日からサラ・ベルナールがルネサンス劇場で初演しました。

夫である英雄イアソンの不義に復讐するため、夫を迷わしたコリント王クレオンの娘クレウーズを死にいたらしめ、日の出とともに二人のわが子を手にかけたメディアが、血塗られた短剣を持って立ちつくす凄惨な場面です。

ミュシャがこれまでサラを描いたポスターとは異なり、暗い色調と硬質な表現でメディアの深い悲しみと怒りを描き出しています。

ポスター上部のモザイク模様はビザンティン風で、また「メディア」というタイトル文字の D をギリシャ文字デルタの形にし、このドラマの舞台はギリシャの都市コリント（ス）であることを示しています。

メディアの左腕にはブレスレットがはめられていますが、これはサラが気に入り、ミュシャのこのデザインをもとにして、宝石をあしらった蛇の形のブレスレットを宝飾商に作らせたものです。

ミュシャは多くの装飾品も手がけていますが、このブレスレットは彼がデザインした装飾品の中でも最高の出来ばえのひとつです。

ここでは蛇のブレスレットに注目して蛇が登場する句を選びました。

季語として「蛇」のみですと三夏になりますが、他の季語と季重なりになる場合は主役の季語を優先しました。

山焼の口火を切れる蛇の舌

中原道夫(なかはら みちお) (1951-)

季語<山焼>で初春

赤松を縞蛇のぼる目出たしや

金子兜太(かねこ とうた) (1919-2018)

季語<縞蛇>で三夏

うつき蛇が纏ひぬ合歡の花 (纏ひぬ=まといぬ) (合歡の花=ねむのはな)

松瀬青々(まつせ せいせい) (1869-1937)

季語<合歡の花>で晩夏

5. 『ハムレット』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1899 - Hamlet.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1899_-_Hamlet.jpg)

1899年 | リトグラフ、紙 207.9 cm × 75.5 cm

ご存知、イギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）の四大悲劇の一つ。デンマークの王であった父を毒殺して王位に就き、母をも奪った叔父に王子のハムレットが復讐する物語。

「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ（To be , or not to be）」の台詞はあまりにも有名。

主人公のハムレットは俳優なら一度は演じてみたい役といわれています。

以前にサラ・ベルナールは『ハムレット』に出演した時オフィリア役でした。

男役のロレンザッチオが好評だったことから、今度はハムレット役に挑戦してみたいと思うのは無理からぬところです。

そのころの『ハムレット』は翻案や数種類の喜劇として演じられることが多くありました。

サラはシェイクスピアの原作に忠実な舞台化を試み、ハムレット像の解釈も憂鬱そうな哲学青年ではなく、剣を唯一の頼りとばかりに胸に抱え、強い決意を秘めた凛々（りり）しい姿で演じました。

ミュシャのこのポスターは、サラの舞台姿から髪形を忠実に写し取り、衣裳を単純化して描いています。

ハムレットの背後には殺害された父親の亡霊が、足もとには悲しみのあまり正気を失い溺死した恋人オフィリアが描かれ、ハムレットの孤独感が強調されています。

このポスターがミュシャがサラのために制作した最後のものです。

最初に契約した六年の期限がこの年に終わったのです。

この後も二人の交流は続いていましたが、1900年にパリで開催された万国博で、ミュシャはオーストリア館とボスニア・ヘルツェゴビナ館の装飾を担当することになり、1899年にはその準備に専念しなければならず、サラ・ベルナールの仕事を続けることができなかったという事情があったようです。

ハムレットには毒薬、毒剣、毒入り酒と毒がよく登場します。

ここでは毒と有毒植物・毒茸を詠んだ句を選びました。

蟹と老人詩は毒をもて創るべし

佐藤鬼房(さとう おにふさ) (1919-2002)

季語<蟹>で三夏

幾人か敵あるもよし鳥かぶと

能村登四郎(のむら としろう) (1911-2001)

季語<鳥かぶと>で仲秋

毒茸月薄目して見てみたり

飯田龍太(いいだ りゅうた) (1920-2007)

季語<茸>で晩秋

最後にサラ・ベルナールの写真をあげておきます。



1865年に撮影されたサラ・ベルナール

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sarah_Bernhardt_by_F%C3%A9lix_Nadar_2.jpg

1878年頃のサラ・ベルナール

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sarah_Bernhardt_by_Paul_Nadar_\(crop\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sarah_Bernhardt_by_Paul_Nadar_(crop).jpg)



1890年代に撮影されたサラ・ベルナール

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:SarahBernhardt.png#/media/File:SarahBernhardt.png>

私も詠んでみました。

魂をなぐさめる白椿咲く

白井芳雄

季語<椿>で三春

今回は「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その 1 ミュシャとサラ・ベルナール」をお届けしました。

次回もミュシャの作品をお届けします。

全体を通じての参考文献、出典：島田紀夫著

『アルフォンス・ミュシャ

アール・ヌーヴォー・スタイルを確立した華麗なる装飾』(六耀社)(1999年)

ISBN4-89737-366-2 C0071

ミュシャ・リミテッド編・島田紀夫監訳

『アルフォンス・ミュシャ 波乱の生涯と芸術』(講談社)(2001年)

ISBN4-06-210541-1 C0071

千足伸行著

『ミュシャ作品集-パリから祖国モラヴィアへ-』(東京美術)(2012年)

ISBN978-4-8087-0946-4 C0071

大友義博監修

『もっと知りたいミュシャの世界』(宝島社)(2019年)

ISBN978-4-8002-6906-5 C9471

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)

ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』(角川学芸出版)

ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』(角川学芸出版)

ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』(角川学芸出版)

ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』(角川学芸出版)

ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』(角川学芸出版)

ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子

『日本の365日を愛おしむ』(東邦出版)

ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F
TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com